

## 集英社の『自選集』と『日本文学全集』

田 坂 憲 二

### 一、はじめに

小学館の「つ橋グループ」の中核である集英社<sup>(正)</sup>は、雑誌や  
娯楽路線中心のイメージがあるが、手堅い文芸ものでも多  
くのすぐれた出版を手掛けている。また若年層にターゲット  
トを絞った書籍、文庫、雑誌の分野では常に先頭集団の中  
で走り続けている。

その集英社は、かつて矢崎進也が喝破したごとく、世界  
文学全集の分野でも、「後発」の出版社であったが、その刊  
行では最も熱心な出版社<sup>(正)</sup>なのである。実際、世界文学全  
集の刊行がピークに達した六〇年代半ばに「二〇世紀の文  
学 世界文学全集」で参入したときは、やや遅きに失した  
集英社の『自選集』と『日本文学全集』

観もあつたが、その後、小型のポケット版『世界文学全  
集』六六巻、大型の愛蔵版『世界文学全集』四五巻、中型  
の『世界の文学』三六巻、同じく中型のベラージュ『世界  
文学全集』八八巻などを立て続けに世に問い、文学全集離  
れの進む、七、八〇年代を支え続けた。八〇年代末、年号  
は平成に移った後も『ギヤラリー』世界の文学』を刊行、唯  
一の世界文学全集を提供している功績は特筆するに値す  
る。

世界文学の分野に比べると、日本文学全集の分野では地  
味な動きであるが、それでも全八八冊の全集を刊行した  
り、署名入りの自選集や、純文学と大衆文学の境界を払っ  
たような全集を出したり、積極的な動きをしている。全八

八冊の大部の全集は、改装版ということを考えるときに面白い問題を提起するようである。本稿では、この集英社の日本文学の全集について考察を行う。

## 二、一九六一年から六二年にかけて

集英社の文学全集を考えるとき、一九六二年（昭和三七一年）という年は逸すことができない。この年、集英社は『新日本文学全集』『世界短篇文学全集』という二つの叢書の刊行を始める。ともに後の『日本文学全集』と『世界文学全集』・『世界の文学』の母胎となったものと考えてよい。いわば、ブレ『日本文学全集』『世界文学全集』といつてよいが、この二つの叢書の淵源を更に遡れば、前年一九六一年の企画に到達する。

集英社が、グループ総帥の小学館と同様に、児童対象の書籍や雑誌の分野で他の出版社を引き離れた力を持っているのは周知のことであるが、全集への参入に際しても、この得意分野での実績をひっそりさせてのことであった。それが、創業三五周年記念事業の『少年少女日本歴史全集』と『ひろすけ幼年童話文学全集』である。この二つは、集英社の社史である『集英社七〇年の歴史』でも言及されており、とくに後者は大きく取り上げられて、『業界の予想をはるかに上回る大ヒット企画』となったこと、

『最終的には四〇〇万部を越えるだろう』と推測されたことなどが記されている。ここでは、社史では記述の少ない前年について簡単に見ておこう。

『少年少女日本歴史全集』は、全二巻。菊判のたつぷりとした判型に、上下二段にゆったりと版組がなされ、漢数字を除いて総ルビで年少者にも読みやすいものであった。沢田重隆の装本や、佐多芳郎、川田清実、下高原千歳らの挿絵も美しくかつ親しみやすく、定評のある小学館『図説日本文化史大系』などに拠っている図版もすばらしかったが、なんといっても、尾崎士郎・和歌森太郎ら編著者の文章の力である。高度の内容を平易に書きながら、圧倒的な筆力で年少の読者をぐいぐいと引き込んで放さないかった。このシリーズによって歴史好きになった少年少女は多かつたに違いない。組版が面倒な系図などは、時に手書きで挿入されているのが、当時は偶らせてほほえましい。本編の読み物としての楽しさ、人間ドラマ・物語としての面白さと、相互補完するように、適宜挿入される「しおり」で歴史の流れについて深く学ぶようになっていた。相当幅広い年齢層の少年少女が満足できるように本作りであった。幅広いといえば、「指導される方のために」という副題の付いた「あとがき」があったり、この種の本としては珍しいほどのきちんとした「さくいん」など、教

師の副読本のな役割も持っていたのかもしれない。小学校の先生などを通して、知らず知らずのうちこの本の内容に触れていた少年達もいたのではないか。もうひとつこの叢書の特徴として、分冊ごとの印象的なタイトルがある。

外函には大きく「少年少女(角書き)日本歴史全集」と刻印され、分冊ごとのタイトルは小さく記載されるだけであるが、書物本体の背表紙には「貴族の黄金時代」「南北朝の悲劇」「あらしをよぶ暮末」などの魅力的な分冊ごとの編者が大書されている。これらの靈感的ともいえるタイトルに惹かれて、書物を手に取った子供たちも少なくなかつたろう。巧妙なキャッチコピーはこの出版社の得意とするところでもあった。このコピーの力が遺憾なく発揮されたのが、六年の『新日本文学全集』の内容見本である。

別稿でも述べたが紀田順一郎の『内容見本にみる出版昭和史』は内容見本から出版文化史を浮かび上がらせる好著で、面白い内容見本が数多く取り上げられているが、その中でも五ペーシに亘って紹介されている『新日本文学全集』のそれは異色中の異色である。「五五人の作家への電話(テレ)インタビュー」では「月最高の執筆量」「ひびきのプロ野球球団」「ふとした時口さむ歌」など一風変わった項目ばかりである。「内容見本としてはめずらしく、構成は沢田重隆・鈴木康行、コピーは西尾忠久らの制作又

タツフ名が記されている」ように、集英社は広報の重要性に早くから気づいていた。沢田重隆は上述の『少年少女日本歴史全集』の装丁担当でもあった。

さて、この『新日本文学全集』は「若い世代のために、初めて編集された、戦後文学のベストセラー集」(戦後の文学の動き、流れを作家単位に系統付けた新編集<sup>モト</sup>1)と記されるごとく、阿川弘之・庄野潤三の第一巻から、吉行淳之介の第三巻まで、戦後派の作家をずらりと並べたもので、五味康祐、柴田錬三郎、南条範夫らの時代小説、高木彬光、島田一男、多岐川恭、佐野洋らの推理小説など、大衆的な人気の高い作家や作品を集めているところに特徴がある。もちろんその一方で、『野火』『俘虜記』の大岡昇平、『真空地帯』『暗い絵』の野間宏をはじめ、梅崎春生、『樞島』田宮虎彦、『足摺岬』堀田善衛、『広場の孤独』大江健三郎、『飼育』島尾敏雄『死の棘』など、戦後の文学史を語る上ではまずこのできない作家や作品はきちんと押さえられている。五九年二月の『井上靖集』から配本を開始、三月の『三島由紀夫集』、四月の『源氏鶏太集』とのみ記順調に滑り出した。配本開始時点で『新作長編』とのみ記され収載作品が未決定であった松本清張は、六五年一月の三六回配本で『ある』『小倉日記』『伝』『張込み』『球形の荒野』などが収録された。

この全集は月報に到るまで十分に楽しめるものであった。第一巻の「阿川弘之の美しい奥さんのこと」(藤原審爾 月報二、第二回配本)をはじめ、「遠藤狐狸庵先生のこと」(三浦朱門、月報二六)、「牛若丸朱門」(進藤純孝、月報三四)など傑作揃いである。「クモノス城」のおるじ「蓼科大王」こと梅崎春生について語る抱腹絶倒の「練馬王について」(遠藤周作 月報一八)や、菅野綾子の一面を見事に浮き彫りにした、「遠来の客達」の頃」(山川方夫、月報二三)など、月報で一冊の本を編みたいほどである。読み物としての面白さ満載の記事がある一方で、資料性の横溢した瀬沼茂樹「戦後文学編年史」も連載されており、そのあたりのバランスも絶妙であった。

六二年にやはり配本を開始した『世界短編文学全集』の成功が六五年からの『世界文学全集』につながっていくように、この『新日本文学全集』の取り組みが、六六年からの全八巻の大がかりな『日本文学全集』の下地作りとなったことは間違いない。ちなみに、『新日本文学全集』と『世界短編文学全集』は、共にきらびやかなシルバークレイの函が極めて印象的で、この年日本と世界の文学全集分野に鮮やかに躍り出た集英社を象徴するような、明るく鮮やかな造本であった。

### 三、「自選集」シリーズの骨格

『新日本文学全集』も三分の二の配本を終えた頃、一九六四年二月刊行の第二九巻「福永武彦・安部公房集」の挟み込みチラシに目を引く一つの広告が載っている。「豪華限定版」『著者直筆サイン入り』の「文学自選集」のシリーズの企画がそれで、第一回配本として『石坂洋次郎自選集』が予告され、「第一回配本 三月下旬 以下三か月 一冊ずつ配本 限定版二〇〇〇部サイン入り 特装菊判変型・総装装 四〇〇ペジ 各巻一八〇〇円」と記されていた。

第一線で活躍中の大家・文豪十余人に自作を選んでもらい、肉筆の署名を入れ、総装装で天金を施すなど豪華な装いで、一〇〇〇部限定出版の特製本のシリーズを企画したのである。判型やペジ数の近い『新日本文学全集』が三九〇円の時代に、定価一八〇〇円であるからかなり高額な値段設定であるが、それでも高嶺の花とまではいかず、多少無理をすれば手の届く範囲といったところであろうか。一〇〇〇部という部数も、限定本としては異色の多さである。やや矛盾した言い方であるが、限定本の普及版 特装本の普及版を目指したのであろう。東京オリンピックの年、黄金の六〇年代を象徴する年に、正に相応しい企画で

あった。後に、二見書房の『自选作品』シリーズが企画されるなど、追隨するものも出てくるほどである。この集英社の自选本シリーズは現在でも一定の評価を保ち、人気の『三島由紀夫自选集』『川端康成自选集』は、保存の良いものであれば一〇万円前後の古書価が付いている。

ただ一〇〇部という部数の多さはあっても、特製本・限定本という性格上、全冊を揃えている大学図書館や公立図書館はない。納本制度に支えられている国会図書館でも全一四冊のうち、一〇冊しか所蔵していない。また国会図書館の一〇冊のうち、内容細目(所収作品)まで含めた詳細な書誌が作成されているのは六冊のみである。上述したように、大学図書館・公立図書館の所蔵も少ないので、このシリーズの全体像を示しておく。発行年月、総ページ数、解説担当、署名の形式に加えて、NDL-OPACに内容細目が無いものについては全作品名をあげた。

- 国会蔵・細目有
- 一、石坂洋次郎自选集(六四年三月一〇日)
  - 三九七ページ、解説・亀井勝一郎、署名・石坂洋次郎
  - 所収作品 草を刈る娘、若い川の流れ、麦死なず他
  - 二、三島由紀夫自选集(六四年七月一〇日)
  - 国会無
  - 三九八ページ、解説・橋川文三、署名・三島由紀夫

集英社の『自选集』と『日本文学全集』

三 源氏鶏太自选集(六四年一月一〇日)

国会無

三九七ページ、解説・小松伸六、署名・源氏鶏太

所収作品 たばこ娘 木石に非ず、初恋物語、随行き

人、台風さん、英語屋さん、後妻の話 お妾さん、もう手遅れ会 無紹嘯託室解散 波 帽子、流水、天衣無縫、そろばん侍 印度更紗、喧嘩太郎、子等がため、精力絶倫物語、最後の芸者、鬼譲長、東京一淋しい男

四 獅子文六自选集(六五年三月一〇日)

国会蔵・細目有

四一四ページ、解説・河盛好藏、署名・獅子文六

所収作品 南の風、達磨町七番地、てんやわんや他

五、井上靖自选集(六五年七月一〇日)

国会蔵・細目有

四〇六ページ、解説・福田宏年、署名・井上靖

所収作品 天平の鬘 狐銃、焼捨、楼蘭、洪水、詩

他

六、志賀直哉自选集(六五年一月一〇日)

所収作品 潮騒 美德のよろめき、金閣寺、憂国、百万煎餅、沈める滝 大障襖、ワットオのシテエルへの船出

国会蔵・細目有、三八〇〇円四三〇部

三九八ページ、解説・瀧井孝作、署名・直哉

所収作品 暗夜行路 城の崎にて、赤西囃犬、灰色の

月他

七、川端康成自選集（六六年四月一〇日）

国会蔵・細目無

三九九ページ、解説・山本健吉、署名・川端康成

所収作品 十六歳（十四歳）の日記、伊豆の踊子、抒

情歌、二十歳 禽獣、田舎芝居、日雀、雪国 千羽

鶴、岩に痴、山の音、弓浦市、眠れる美女

八、武者小路實篤自選集（六六年七月一日）

国会蔵・細目無

三九八ページ、解説・河盛好藏、署名・實篤

所収作品 「それから」に就いて、お目出たき人、雑

感、「自己のため」およびその他について、幸福者、

友情、人間万歳 桃源にて、だるま、マナスルオー・

トラン・ピカソ訪問記、愛と死、馬鹿一、真理先生

詩

九、谷崎潤一郎自選集（六六年八月三〇日）

国会蔵・細目無

三九八ページ、解説・江藤淳、署名・谷崎潤一郎（代

筆）・雪後庵（落款）

所収作品 刺責、鞆間、小さな王国、母を恋ふる記

お国と五平、卍 吉野寛、武州公秘話、春琴抄、少将

滋幹の母、鍵

一〇、山本有三百選集（六七年二月二日）

国会無

三九八ページ、解説・浦松佐美太郎、署名（一部）・

有三

所収作品 兄弟、子役、チャコレット、ふしゃくし

んみょう、こぶ、無事の人、嬰兒ごろし、同志の

人々、女人哀詞、道しるべ、芸術は「あらわれ」な

り、空外飛行、すわり、正方形と円、途上、一即

多、いずこに訴えん、隠れたる先覚者・小林虎三郎、

竹、ロハス大統領と神保中佐「銀河」の初めに、

戦争放棄と日本、アメリカと直線「文化の日」が

きまるまで、紀元節について、母の思い出、閑居雜

吟

一一、丹羽文雄自選集（六七年一〇月一五日）

国会蔵・細目無

三九七ページ、解説・浅見淵、署名・丹羽文雄

所収作品 鮎、贅肉、煩惱具足、菜の花時まで、南

国抄、隣人、再会、怒濤、夢想家、厭からせの年

齢、天童 洗濯屋 盛粧、砂地、こおろぎ、爛れた

月、劇場の廊下にて、柔媚の人、崖下、もとの顔  
うなずく、お吟、水溜り、ある青年の死、峨  
一一、舟橋聖一自選集、(六八年二月一日)

国会蔵・細目有  
三九七ページ、解説・長谷川力、署名・(舟橋)聖一  
所収作品 木石、篠笛、老茄子、鷲毛、たか女寛書  
他

一三、石川達三自選集(六八年五月一日)  
国会蔵・細目有  
四〇六ページ、解説・久保田正文、署名・石川達三  
所収作品 頭の中の雀み、二代の杓恃、風雪他  
一四、井伏鱒二自選集(七八年一月一日)  
国会無

四七六ページ、解説・小坂部元秀、署名・井伏鱒二  
(鱒二の落款)  
所収作品 黒い雨、鯉、屋根の上のサワン、白毛  
追剽の話、中込君の雀、軍歌「戦友」

どの作家も、四〇〇ページ(井伏鱒二自選集)は除く、  
次節参照)という紙幅の制限があるから、自身の代表作の  
中からどの作品を収録するか苦慮したであろう。『細雪』  
『鍵』など戦前・戦後の代表作をバランス良くならべてい

集英社の『自選集』と『日本文学全集』

る。『若い人』を収録できなかった石坂洋次郎はその替わ  
りという意識で『妻死なず』を末尾におさめたのではない  
か。この企画と、代表作がびたりと一致した作家は『暗夜  
行路』と好短篇のほとんどを収録できた志賀直哉、『伊豆  
の踊子』『雪国』『千羽鶴』『山の音』をすべて収録できた  
川端康成であっただろう。三島由紀夫の場合も、『潮騒』  
『金閣寺』と一般読者に人気の高い作品に、三島自身が是  
非とも収録したかったはずの『憂国』と、平衝感覚にすぐ  
れている。武者小路実篤のように短編中心の作家は作品選  
定も困難ではなかったが、山本有三のように長編の成長小  
説に本領を発揮する作家は多少苦しい選択となった。山本  
の場合『波』『真実一路』『女の一生』『路傍の石』いずれ  
も収録できず、『ふしやくしんみょう』『無事の人』『嬰兒  
ごろし』などで気を吐いた。『二等重役』を収録できない  
源氏鶏太も、直木賞受賞の『英語屋さん』など「さん」  
シリーズを中心に自選している。井伏鱒二は『山椒魚』も  
『シヨク万次郎漂流記』も『本日休診』も収録せずに、黒  
い雨』を中核に据える思い切った構成である。このよう  
に、それぞれの収録作品に作家自身の強い思い入れも窺わ  
れる面白シリーズであるといえよう。

#### 四、「自選集」シリーズの諸問題

前節でまとめた自選集の一四冊を見ると、最後の『井伏 鱒一自選集』のみが、他の作家と比べて刊行年月が大きく隔たっていることが注目される。それ以前の二三冊が、一六四四年から六八年の五年間に集中して出されているのに比べて『井伏鱒一自選集』のみが一九七八年の刊行なのである。実際この一冊だけは装丁が全く異なる。一三冊は金を多用した伊藤憲治の鮮やかな装丁で、色交わりの表紙（建）が鮮明な印象を残すのであるが、『井伏鱒一自選集』の川島羊三の装丁は表紙の平や背文字に金文字を使用するものの極めてシンプルなデザインである。組版も二三冊が二段組であるのに対して、井伏のみ一段でゆったりと組んでいる。そのためか他の二三冊が四〇〇ペーシ内外で平均した厚さであるが、この冊のみ四七六ペーシと厚冊である。判型も井伏のもののみ天地が数ミリ小振りである。限定番号を記す検印紙のデザインも書式も井伏の冊のみ異なる。定価も、後述する『志賀直哉自選集』以外は二八〇〇円であったのに対して、『井伏鱒一自選集』だけが八五〇〇円と大きく隔たる。同一のシリーズの一冊ではあるが、刊行時期が大幅に遅れたために、装丁・組版・判型・定価など大きく異なってしまったのであった。

猶、これら一四作品は、いずれも二重函入りで、外函は三重枠内に「川端康成 自選集」などと二行書き、その下に「一千部限定」著者直筆サイン入り」と二行書きで記された紙片を貼付する。装丁の異なる『井伏鱒一自選集』も外函の形式は同一である。井伏の冊の段階まで紙片の書式が残されていたのであろう。外函の記載は、『志賀直哉自選集』のみ「四三〇部限定」と記され、他冊と異なる。すなわち当初の三冊のうち、『志賀直哉自選集』のみが、四三〇部と部数を絞り込み、定価も三八〇〇円と割高であることが目を引く。部数と定価との間には相関関係があるうが、限定一〇〇〇部が原則のシリーズであったから、この当時志賀直哉は別格であったということだろう。

このシリーズのセールスポイントは、著者自身が自作を選んだことや豪華な装丁、限定版などの要素もあったが、何と言っても著者の肉筆署名入りということが大きかった。扉の後、目次の前に著者の近影が挟まれているが、その写真に薄様が重ねられ、その薄様紙の下の左端に「著者直筆サイン」と小さく印刷されている。第一回配本の『石坂洋次郎自選集』と、装丁の異なる『井伏鱒一自選集』とには、この文字がない。『谷崎潤一郎自選集』は、谷崎が自選集刊行前の一九六五年七月に逝去して、没後の刊行になったから、「谷崎潤一郎夫人サイン」と印刷した上で松

子夫人の代筆で「谷崎潤一郎」と署名、「雪後庵」の落款が押される。大部分の署名は、「著者直筆サイ」の印字に近いあたり、下半分のやや左寄りに記されることが多いが、三島由紀夫のように紙いっばいに大書している例もあり、作家の個性が何われて面白い。「石坂洋次郎」「井上靖」の二人はペン書き、それ以外は墨書である。基本的にフルネームであるが「直哉」「實篤」「有」の三人は名前のみである。また舟橋聖一はフルネームと「聖一」と名前だけの形式が混在する。

猶『山本有三自選集』のみは、署名人本・無署名本の両方がある。福岡女子大学所蔵四二三番本は無署名本である。手許の資料では、二五番本は署名があるが、二〇番本は無署名である。無署名本は薄様紙も差し替えられたらしく「著者直筆サイ」の文字がない。署名が終わらないうちに山本の体調不良ということになり、二〇番前後から無署名本となったのであろう。因みに、二〇番本には「種々の事情により、発行の期日に遅れましたことを、ふかくお詫びいたします。文学自選集編集部」という紙片が挿入されており、この間の事情が伺われる。

最後にこのシリーズの冊数について考えてみたい。「集英社の七〇年」第二部年表の三二一ページ、昭和三九年（一九六三）三月一〇日の項には、「総革装の著者サイニス集英社の『自選集』と『日本文学全集』

り豪華限定本『石坂洋次郎自選集』（二八〇〇円）刊行。以後七月刊の『三島由紀夫自選集』から四〇年の志賀直哉 四一年の谷崎潤一郎をへて、五三年一月刊の『井伏鱒二自選集』まで文壇巨匠の自選集を逐次企画 一五巻を刊行する」と記されている。

ところが、現在までに確認できたのは、一覽表に示したごとく一四人の作家の自選集であった。筆者の調査漏れの可能性はあろうが、この一四人以外のものは、国会図書館にも、主要大学にも、主要公立図書館にも一冊も所蔵されていないし、書籍目録の類にもまったく出てこない。もう一人の作家の自選集がある可能性は極めて低かろう。

「二五巻」というのは、「一五人」の作家の自選集ではなくて、「二五冊」の自選集ではないだろうか。実は、川端康成のみが集英社から二種類の自選集を出しているのである。一つは、前掲のテータクの中に示した、六六年四月一〇日発行の三九九ページのものである。そして、全く同一書名の『川端康成自選集』が同じ集英社から、一九六八年一月二九日に刊行されている。こちらは四二一ページで、装丁も全く異なる。これは、川端のノベル文学賞を記念して作られたもので、<sup>（五三）</sup>のち市販された。六六年の限定版の自選集に、ドナルド・キーンの「川端文学にみる普遍性と日本的特徴」という解説（和文、朝日新聞社『世界の中の

日本文学』より転載）と、川端の作品と翻訳の問題を論じたサイネシステッカーの解説（英文）合計一〇ページを末尾に付載した。装丁は、自選集シリーズとは異なるものとし、装丁装画は東山魁夷、題簽は宮田遊記、表紙は人間国宝中村勇二郎の伊勢型小紋であった。函に使用された東山魁夷（註三）の竹林の下絵は殊に川端の気に入ったものであった。猶口絵の写真も、元版は六五年の伊豆の踊子文学碑除幕式のものであったが、「ノベル文学賞発表表の日深夜、書齋で」ほか一葉（撮影米津孝）に改められている。市販の定価は、シリーズのものと同じく一六〇〇円であったが、ただ部数の限定はせず、著者の署名も付けた。ところが、書名が『川端康成自選集』と同一であり、発行時期も近かったために、社史作成の際に混同してしまったのではないか。定価が同じであったことも混乱に拍車を掛けたかもしれない。そういった事情であるとするならば、六八年の川端康成自選集はこのシリーズとは別物であるから、自選集シリーズは「四巻」とした方が、誤解を招かずにすむかもしれない。

## 五、『日本文学全集』の誕生

して、総合的な『日本文学全集』を集英社が世に送ったのは、一九六六年のことである。編集委員に伊藤整・井上靖・中野好夫・丹羽文雄・平野謙らをずらりとそろえ、作家の選定、作品の選択、解説など充実した極めてオソッドクスの全集である。小B六判ながら全八冊の堂々たる全集であった。冊数だけで言えば、五〇年代に刊行を始めた筑摩書房『現代日本文学全集』や講談社『日本現代文学全集』に次ぎ、先行する新潮社『日本文学全集』や中央公論社『日本の文学』、雁行する文藝春秋『現代日本文学館』、最も競合したと思われる河出書房の各種日本文学全集をしのぐ、規模の大きな全集であった。

『集英社の七〇年』の記述するところによれば、『文学全集』のゲームはすでに峠をこえていた」という認識にも関わらず、従前の全集の購買層よりも下の「高校生に目標をしぼり」「定価を思い切って下げ」、毎月二冊を同時配本して採算を計る「ペーパー配本の奇策」で、この分野に参入、大成功を収めたのである。（註四）

もう一つこの全集で忘れてならないのは、第一巻『坪内逍遙・二葉亭四迷集』第二巻『尾崎紅葉・泉鏡花集』に始まり、八六・八七・八八巻の『名作集（一）』（三二）まで、明治・大正・昭和三代の日本文学をバランスよく収載していることである。高校生対象といっても、決して読みやす

『新日本文学全集』や豪華自選集シリーズなどで蓄積した編集・営業のノウハウをもとに、文芸部門の力を総結集

い、口当たりの良い作品ばかりではない。『葛西善藏・嘉村磯多集』『粟山嘉樹・黒島伝治・伊藤永之介集』など地味だが近代文学を語る上で欠かせない作家や作品をきちんと押さえていること、散文のみならず韻文にも目配りがなされていることなど、実に行き届いた全集である。集英社が立案実行した「高校生のための文化講演会」が、この全集の売れ行きを支えたこともまた間違いないが、体系的・総合的という全集そのもの自力・底力こそ、第一に指を屈すべきであろう。ともあれ、文化講演会とこの全集が、高校生で文化や文学・教養を支えた功績は極めて大きいと思われる。配本にも、高校生を意識した選定がなされた。第一回配本は三卷『武者小路実篤集』五八卷『石坂洋次郎集』であった。言うまでもなく武者小路は当時の高校生に最も良く読まれた作家の一人で、代表作『友情』は、高校生のいわゆる洗礼本の、第一位と見做すこともできる。当時の武者小路が中高校生に集中する形で支持を集めていたのに対して、石坂洋次郎の方は、それほど強固な信者は少なかったかもしれないが、そのかわりもうすこし幅広い年齢層の若者に読まれていた。また石坂の場合は映像の影響も大きかった。五〇年代から六〇年代半ばに掛けては映画の最盛期であるが、一九五〇年から六九年までの二〇年間

集英社の『自选集』と『日本文学全集』

石坂作品が一度も映画化されなかつた年はないのである。特に『日本文学全集』の刊行の始まつた六六年までの四年間には二〇本近くの石坂作品が映画化されており一つの頂点であつた。五八卷『石坂洋次郎集』の収載作品は長編『陽のあたる坂道』と中編『若い川の流れ』を中核に据えているが、この二作品は石原裕次郎・北原三枝・芦川いずみで人気を博した、当時の日活を代表する作品でもあることは周知の通りである。『石坂洋次郎集』では、ほかに二〇ページ前後の小品四作品が取られている。中で『草を知る娘』は、前節で述べた『石坂洋次郎自选集』にも収載され、戦後の純粋造本の代表格である細川麝書の第一〇冊目に起用された、文字通り牧歌的な作品であるが、六六年当時にはやが古めかしい印象ではなかつたか。この作品を収載したのは作品自体の良さも勿論あるが、日活のもう一つの黄金の組み合わせである吉永小百合・浜田光夫で映画化されていたことも関わつていゝかもしれない。いさか長く映像と文学のことに拘泥したのは、翌月六七年七月の第二回配本にもそれが現れているのではないかと推測されるからである。第二回配本は第四八卷『林美芙子集』第八三卷『井上靖集』である。この全集の編集委員の一人でもあり、第二節で述べた『新日本文学全集』の第一回配本にも起用された井上靖の場合は当然の選択でも

あったらうが、鷗外・漱石・芥川・大宰・谷崎・川端らを抑えて林芙美子を第二回配本に持ってきたのは思い切った抜擢であった。

第四八巻『林芙美子集』は『放浪記』を巻頭に据え『琴と魚の町』『晚菊』『浮雲』らで構成されている。林文学と映像の関係ですぐに思い起こされるのは成瀬巳喜男の仕事である。成瀬は一九五一年林芙美子の没後まもなく、絶筆となった『めし』を映画化するが、この作品は「戦後の成瀬映画を決定したといつてよい」作品で、その後も『稲妻』『晚菊』『浮雲』と五〇年代に林文学を次々とスクリーンに甦らせた。六二年には『放浪記』も映画化している。しかし極めて陰影の深い成瀬の作品と、若年層を対象とした今回の全集との関係性を問うのは難しかろう。林芙美子を第二回配本に持ってきたのは映画ではなく、テレビ映像によるものであったらう。NHKの朝の連続テレビ小説『うず潮』がそれである。一九六四年から六五年三月まで放映されたこの番組は、多くの視聴者の支持を得て、翌々年の『おはなはん』と並んでこのシリーズを根付かせた功績の大きいものである。集英社の『林芙美子集』が刊行された六六年に高校生であった世代は、連続テレビ小説『うず潮』放映時には中学二年生から高校一年生であり、夏休みなどにはこのドラマに夢中になっていたのではなか

らうか。そのあたりの計算に基づき、集英社は『林芙美子集』を第二回配本に抜擢したのであらう。なお、この頃は大当たりした連続テレビ小説はすぐに映画化された。『うず潮』は齋藤武市監督、主演は吉永・浜田の黄金コンビであったが、テレビの林美智子・津川雅彦の組み合わせの印象が強かったのでやや分が悪かったかもしれない。上述した『おはなはん』も、今日では岩下志麻の松竹映画よりも、檜山文枝のテレビ版の記憶を持っている人の方が圧倒的に多からう。それは、映画からテレビへの交代期とも一致していると思われる。

こうして映像の影響も含め、当時の高校生世代に影響力の強い作家や作品を初期の配本に投入することによって、集英社の『日本文学全集』は順調な船出をした。第三回配本には川端・谷崎という文豪を登場させて多少変化を持たせ、第四回配本には女子学生に人気の堀辰雄と、中学・高校生に支持の多い山本有三を起用した。文学全集の定番とも言うべき芥川は第五回配本、漱石を第六回配本と、本格的な全集を指向する方向性と、親しみやすさ・入りやすさを希求する方向性の、見事な調和であった。

第一回配本の武者小路実篤、石坂洋次郎の二冊が「それぞれ四〇万部の累計部数に達する」という好スタートを切ったこの全集は、その後も順調に配本を重ね、七〇年四

月に全八冊の刊行を終えることとなる。

## 六、『日本文学全集』の影響と改変

集英社の『日本文学全集』の発刊時の爆発的な売れ行きは、同様のシリーズを刊行中の他社に大きな影響を与えた。六六年六月頃、刊行中の日本文学の全集は、筑摩書房『現代文学大系』、中央公論社『日本の文学』、文藝春秋『現代日本文学館』などがあつたが、比較的読者年齢の高かったこれらの叢書に比べて、年齢的に重複する部分が大きかったのは豪華版やカラード版の『日本文学全集』を刊行中の河出書房であつた。河出書房は六六年中に完結した『現代の文学』をはじめ、読みやすさと、面白さの追求にも余念がなかつたから、共通する部分かなり多かつたのである。

しかも、集英社の『日本文学全集』の判型は、河出書房のロングセラードであつたグリーン版『世界文学全集』と同じで、グリーン版が函も表紙も印象的な緑色で統一するのに対して、集英社の全集は函や表紙に鮮やかな赤を使用し、て、叢書を象徴するシンボルカラーを設定するという点でも共通した。さらにグリーン版は本冊に横方向に溝の走る独特のビニールカバーを掛けて清新な印象を与えたが、多少デザインこそ違え、集英社版も同じ横溝のビニールカバー

集英社の『自選集』と『日本文学全集』

パーを用いているのである。<sup>(註五)</sup>

河出書房は世界文学全集の分野で、グリーン版、カレット版、ポケット版、キャンパス版と小型版の全集を相次いで刊行して若年層の開拓を図っていたから、日本文学の分野でも集英社に席巻されてばかりはいなかつた。集英社『日本文学全集』の発刊から一年後に、グリーン版『日本文学全集』の刊行を開始する。このグリーン版『日本文学全集』は、集英社版『日本文学全集』と内容的に通底する部分があり、集英社版を研究したのではないかとも思われる。たとえば、グリーン版は全五二冊であるが、このうち一人の作家で二冊を占めているのは、漱石・藤村・谷崎・武者小路・石坂・湖人・有二であつた。漱石以下の三人は、このような企画で複数冊を占めるのが定番となつている大文豪であるが、武者小路以下の四人はやや異質である。この四人は高校生あたりに人気のある作家であつたことが最大の理由であろう。さらに武者小路実篤と石坂洋次郎の二人は、四〇万部を売り上げた集英社の第一回配本コンビでもあつた。ならば河出としては、二冊にふくませ集英社版では読めない作品もと考へたのではなかつたか。

配本冊数も集英社版と同じく二冊ずつの同時配本でスタートした。集英社版には収載されなかつた下村湖人『次郎物語』の二分冊を第一回・第二回到配本して差異性を強

調すると共に、第一回では『坊っちゃん』の漱石、第二回では『友情』の武者小路と、手堅い布陣であった。『次郎物語』は、中学生あたりの読書調査では毎年上位に来るものの、高校生になるとやや失速気味であるが、恐らくこの調査であげられている『次郎物語』とは少年少女向きに第一部・第二部あたりでまとめたものと思われる。河出書房としては全五部を読める形にすることで、学年が上の読者を擁起起こそうとしたものだろう。集英社・河出書房競い合う形で、若年層向けの全集が刊行され、読者の選択の幅は広がったが、六八年の河出書房の倒産騒動で、一つの全集が雁行する形はあつけなく終焉を迎える。それでも再建後の河出書房はグリーン版『日本文学全集』を完結させ、学年別雑誌を刊行している学習研究社と旺文社が『現代日本の文学』『現代日本の名作』を刊行するなど、高校生あたりを中心に読者とする企画が後継することとなった。このように集英社の『日本文学全集』の果たした役割は大きかったが、もともと体系的な総合的な全集であったから、高校生以上の、多少年齢が高い読者層の大きな支持も得ていた。そこで装丁を改め、判型を大きくして愛蔵するに足りる装本として、さらに幅広い年齢層に受け入れられることをねらって、改裝版を刊行することとなった。元版の完結の翌年、一九七一年のことである。

元版は小六判、手軽に持ち運べるコンパクトサイズであり、若年層への普及を考えたために、定価も抑えて一冊二元〇円であった。そのため、外函はやや簡易な紙函であり、長く愛蔵するに足りるといふ本造りではなかった。今回は判型を四六版に改め、外函も堅牢な貼函にし、表紙のクロスもより上質なものに、月報のペーじも倍増させた。『愛蔵版』という新しい名称に相応しいものであった。一体、このような全集の場合、元版を改裝したり、改編したりして新たな版を作るとは珍しいことではない。特に元版の評価が高かったり、高い発行部数であったりした場合、多少のモデルチェンジで新しい購買層を開拓しようとする試みがなされることが多い。その一例として、集英社のこの全集を考えてみたい。

本節の見出しでは「改裝」とい、今「改裝」「改編」の語を使用したか、論述の正確を期するために、これらの言葉について、具体例を挙げながら稿者なりの定義を与えておきたい。「改裝」の例は世界文学の全集の方が豊富であるので、それらを主に使用する。

① 改裝……判型を改めずに、装丁を改めること。

河出書房が、『決定版世界文学全集』（一九五三年刊行開始、紙函入、装丁恩地孝四郎）を、『特製豪華版世界文学全集』（一九六一年、貼函入、装丁原弘）に改裝。判型は

菊判、冊数は八〇冊共に変化がないが、恩地孝四郎の明る  
い装丁から、黒を基調とした落ち着いたものからりと変  
わっている。筑摩書房『現代文学大系』（一九六三年刊行  
開始、装丁真鍋博）を、『日本文学全集』（一九七〇年）と  
したものは、箱や表紙のデザインは同じで色違いであるだ  
けだが、叢書名が異なるので、この範疇に含まれる。

② 改判……判型を改めるもの。通常装丁の変化も含  
む。稿者の造語であり、同音の「改版」と意味の混同  
に注意する必要がある。

河出書房が、小B六判のグリーン版『世界文学全集』  
（一九五九年刊行開始、装丁原弘）を、四六判の「河出世  
界文学大系」（一九八〇年、装丁広瀬郁）に改判。判型が  
大きくなつて四周がゆつたりとしている。この場合は装丁  
の変化を含むので改装改判版と呼ぶ。装丁の変化を含まな  
い改判もないわけではない。文学全集の例ではないが中央  
公論社が、A五判の『谷崎潤一郎新々訳源氏物語』（全一  
巻、一九六三年刊行開始、安田靉彦装丁）を、同じ材質  
同じデザインの上製本・貼函入で、判型だけ小型にした新  
書版（一九七七年）に改めたものなどがそれである。

③ 改編……全集骨格は不変だが、冊数や一部内容の変  
化を伴うもの。売れ行きの良い巻に絞つたり、時に追  
補の巻があることがある。

新潮社が、小B六判の『世界文学全集』（一九六〇年刊  
行開始）を、判型はそのまま、四〇冊版（一九六九年）、  
四五冊版（一九七一年）などに改めた例。改編版の場合  
は、装丁や判型の変化を伴うから、改装改編版または改判  
改編版と呼ぶことにする。この例は、改装改編版である。  
同じ新潮社の『日本文学全集』は七二冊、五〇冊、四〇  
冊、四五冊と、さらに改編の幅が大きい。

④ 改変……節題に用いた「改変」とは、これら、改  
装・改判・改編の総称である。

集英社の『日本文学全集』は冊数の変化を伴わず、装丁  
と判型を改めたものであるから、改装改判版である。この  
全集のような冊数の多い日本文学全集の改変の例として  
は、すぐ間近に、先行する好例があった。講談社の『日本  
現代文学全集』である。これは一九六〇年から約一〇年の  
歳月を掛けて完成させた一〇八巻の元版を、一九六九年に  
『日本現代文学全集』豪華版として再構成したのである。  
判型は元版と同じA五判であるが、装丁をがらりと変え  
「厚表紙カーフ張り四色箔押し」の豪華な装丁とした。装  
丁以上の大きな変化は、一〇八冊を三八冊に絞り込んだと  
いうことである。『日本現代文学全集』は、評論や韻文に  
も非常に手厚い布陣で、玄人受けのする編集であったか  
ら、小説中心の売れ筋の巻に思い切つて絞り込んだの

講談社の豪華版の刊行の翌年、一九七〇年に完結した集英社の『日本文学全集』は、体系だったとしても、一方では高校生にも親しめる部分を希求していたから、講談社の全集のように冊数を絞り込むのは得策ではない。そこで、全冊を改装することを考えたのではないか。冊数に違いが無い以上、購買者に変化を実感させるためには、判型装丁の思い切った改装が必要である。かくして、改装・改判版の計画が日程に上ることになる。

元版と冊数が同じであるから、どの作家を残すか頭を痛める必要がなかった分、細部に到るまで行き届いた、改装作業がなされたようである。豪華版の第一回配本である『川端康成集二』(一九七一年一月、四四四ページ、五九〇円)で、先に完結した元版(小型版)と比べてみよう。猶、今回はノベル文学賞受賞の川端を第一回配本に起用している。

集英社の二つの『日本文学全集』を比較してみると、収載作品やその配列が完全に一致するのはもちろんであるが、本文部分の組版も前回のものをほぼ踏襲しているようである。ページも本文部分は完全に一致する。ただし、完全な版面利用ではなく、新たに版組しているので、句読点の送りなどの関係で、一字分が前後の行に移動するところ

が見える。作品の末尾に付けられていた初出年次は削除されている。挿絵も同じものを使っているが、数ページ前後する場合がある。年譜と、小田切秀雄作成の注解は、小型版では三段組であったのが、一段組に改められて読みやすくなっている。もちろん注解には手が入れられているから項目の出入りがあるし、同じ項目でも書き改められている場合がある。注解は三ページ増となっている。解説は元版のものを利用するが、注解の増ページに伴い、右ページ起しの元版の解説が左ページからとなる。ただし、解説中の写真の位置は、見開きにしたときのバランスからか、元の位置に留めている。写真といえば、巻頭の著者の写真は、元版では刊行の年、一九六六年撮影のものが使われていたが、豪華版では一九七〇年の近影に改められている。従来、改装版や改編版の場合、著者の写真などは元版のものを使うことが多い、そのため現役の作家の場合やや違和感を感じるのだが、集英社の豪華版では写真を差し替える繊細さである。川端康成はこの全集では二分冊であったから、第一分冊の年譜はもとどし昭和一九年までであった。第二分冊の年譜は、元版では刊行時の一九六六年までであったが、豪華版の『川端康成集二』では七二年六月の発行であるから、同年四月の川端の死まで年譜が補われている。このように豪華版は、注解・写真・年譜のような細

かなところに配慮をした改装改判版であった。

最後に豪華版の配本について簡単に触れておけば、第一回配本は『川端康成集(一)』と『石坂洋次郎集』で、第二回配本は『武者小路実篤集』と『三島由紀夫集』の同時配本であった。石坂・武者小路という元版のコンビを生かしつつ、川端・三島という没後も人気の高い作家を組み合わせたあたり、絶妙の判断であったといえようか。

## 七、おわりに

最初に述べたように、集英社は世界文学の全集の分野では、二〇世紀の最末期まで新たな企画を出し続けるが、日本文学の全集の分野との関わりは短く、七一年から七五年にかけての豪華版『日本文学全集』が最後であった。現代とか、二十世紀とか、ラテンアメリカとか、さまざまな切り口が可能で、新味を追求する余地のあった世界文学の全集の分野に比べ、日本文学全集にはもはやそのような工夫も望めないということであろうか。あるいは、この分野の購読者層が急速に消滅していくことを敏感に察知していたのであろうか。

最後に、集英社文庫の果たした役割について簡単に触れておく。一九七七年に川端『伊豆の踊子』井上靖『白い牙』などで本格的なスタートを切った集英社文庫である

集英社の『自選集』と『日本文学全集』

が、文庫供給過剰気味の現在まで、文庫戦線で重要な位置を占めている。特に恒例となった各社の夏の文庫フェスティバルでは、老舗の△新潮文庫の夏の百冊より低い年齢層にターゲットを絞り、見事な棲み分けを果たしている。△ツイッチという独特のキヤッチフレーズも、第二節で見たこの出版社のコピートのすばらしさと通じている。日本文学の名作が、若者から次第に遠い存在になりつつあった一九九〇年代には、島崎藤村の作品を『初恋』という書名で、高村光太郎の作品を『レモン哀歌』という書名で文庫化している。詩集の中の一編を書名に用いたのである。「高崎藤村詩集」「高村光太郎詩集」という旧来の名称ではなく、このような書名を採用する感性が、多少なりともこれらの作品を若者に近づけたのではなかっただろうか。高校生のための『日本文学全集』を企画した集英社の伝統は形を変えて生き続けているのである。

## 注

- (一) 集英社の二〇〇六年五月末の決算では売上高約一四〇〇億円、小学館単体の約一五〇〇億円に次ぎ、総額四〇〇〇億円の売り上げを誇るこのグループの屋台骨を支える。

- (二) 矢崎進也『世界文学全集』トピアズプレス、一九九七年刊。  
 (三) 『集英社七〇年の歴史』一九九七年八月刊、七七一―七二〇頁。  
 (四) 第三卷七〇ページ「藤原氏の一族」一六七―一七九頁「道長をめぐる人々」など。  
 (五) 田坂「角川書店『昭和文学全集』の變化」『文藝と思想』六九号、二〇〇五年三月、参照。  
 紀田順一郎「内容見本にみる出版昭和史」は、本の雑誌社、一九九二年刊。後『紀田順一郎著作集』一九九八年、三一書房、第八卷に収載、若干の補注がある。  
 (六) 紀田注(五)書。  
 (七) 刊行開始時に準備された二つ折りの内容見本による。紀田注(五)書が引用する、大部の内容見本とは異なるものから引用した。  
 (八) 挟み込みチラシ『集英社出版目録三一九六四』による。  
 (九) 二見書房の『自選作品』は七一年から七六年にかけて刊行された。『田田百間の自選作品』(現代十人の作家1)を例に取れば、一九七二年刊行、限定二〇〇〇部、このシリーズに収載された作家はほかに石川淳、井上靖、井伏鱒二、吉行淳之介らがいる。地味な装丁と発行部数の多さのためか、古書市場での人気は今ひとつのようだ。現代の女流作家シリーズの『平林たい子の自選作品』は、作者の逝去のため、署名紙の残された四五一部に

限ったの刊行となった。同書には、一九七二年二月十七日未明の平林の逝去と、残された署名について記す一枚刷の「謹記」(同年三月付)が挿入されている。集英社版『山本有三自選集』の場合と似たような事情であるが、平林の方は無署名本は刊行されなかった。  
 (一〇) 表紙は二三冊すべてが色違いではない。源氏鶏太・川端康成・舟橋聖一は藍色、志賀直哉・谷崎潤一郎は緑色、石坂洋次郎が赤紫色であるが、薄茶色・栗皮色など茶系のものが多い。見返しの色も黒・薄緑色・緑色・海老茶色など様々である。函は濃淡はあるものの灰色地が多いが舟橋聖一のように薄い桃色のものもある。  
 (一一) 第二回配本の源氏鶏太のように「撮影三木淳」一九六四年四月、東京駒場の自宅にて「などと、撮影者日時・場所が記されたものが基本型であるが、撮影者については志賀・川端・谷崎・舟橋など記載されない場合も多い。撮影者は、三木のほか榊原和夫(武者小路実篤、獅子文六)、木村伊兵衛(山本有三)などで錚々たる顔ぶれて、中扉の裏側に装丁者の伊藤憲治と並んで明記されるが、丹羽文雄のように奥付に「写真・株式会社婦人画報社」と記載される場合もある。ほとんどが自邸での写真であるが、三島由紀夫「NTVスタジオにて」、獅子文六「日生劇場」、川端康成「伊豆湯々野温泉……伊豆の踊子文学碑除幕式」などもある。石坂洋次郎の写真だけは撮影者・日時・場所などの記載が一切ないが、第一回配本のため、様式が確定していなかったであろう。

- (一) 「スウェーデン」での授賞式に持参する献本用として本社既刊の『川端康成自選集』が選ばれ、東山魁夷装幀の特装版を制作する〔注(三)書三三三ページ〕。
- 『川端康成と東山魁夷 響きあう美の世界』(求龍堂、二〇〇六年九月刊)八九ページには、受賞記念として作られた今回の自選集に添えられた挨拶状が掲載されている。
- (一三) 川端は六年一月一日付けの東山宛の書簡で、竹林の下絵を無心している。注(一一)書参照。
- (一四) 注(三)書九五五ページ。
- (一五) 判型・冊数・巻序を総合的に考えれば、新潮社『日本文学全集』の七二冊版が最も近いかもしれない。あれは第一巻『葉亭四迷集』第二巻『尾崎紅葉・幸田露伴集』、末尾の四冊が名作集であった。判型は集英社のこの全集とほぼ同じ大きさで、冊数も近い。
- (一六) 注(三)書九六六ページ。
- (一七) 現代図書館学講座第七巻『青少年の読書と資料』(東京書籍、一九八三年九月刊)、『第三章読書指導』の付表一三、一四に、一九三三年から七九年までの高校生『洗礼本のベスト二〇人選回数』を毎日新聞社が集計したデータがある。学年別では、一、二年生では男女とも『友情』が第一位、三年生では男子が『ころ』に次いで第二位、女子では『女の一生』(モトバツサン)に次いで第三位である。全学年を集計すると、男子では『友情』が三九回で、三五回の『ころ』をpushして第一位、女子で一位、六六年中一男子・六七年中一男子・高(校生)によると、六六、六七年では、六六年中一女子で一位、六六年中一男子・六七年中一男子で二位、
- (二) 「スウェーデン」での授賞式に持参する献本用として、曾根博義『岡本芳雄』書誌情報にすぐれたものとして、川元榮一『細川書店本書E D I、一九七七年二月刊、川元榮一『細川書店本書誌』胡蝶掌本二〇〇六年一月刊、などがある。
- (一九) 井上靖は早く一九五九年の新潮社の『日本文学全集』でも一回配本に起用されている。田坂『新潮社の日本文学全集の動静』『香椎潟』四九号、二〇〇三年六月。
- (二〇) 中古智・蓮實重彦『成瀬巳喜男の設計』筑摩書房、リュミエール叢書七、一九九〇年、二三三ページ。
- (二一) 『山の音』と『晩菊』が、一九五四年、そしてそれに続いて『浮雲』が翌年撤られるわけですが、この時期は戦後の日本映画としても、成瀬巳喜男監督としても最盛期といつてよい〔注(二〇)書、一九七ページ〕。
- (二二) 視聴者の要望でNHKアライヴス二〇〇三年一月五日で取り上げられた。
- (二三) 注(三)書三六ページ。
- (二四) グリーン版については、『河出書房グリーン版の誕生』『文藝と思想』七〇号、二〇〇六年二月、などで述べた。これらの全集については田坂『文学全集から見た河出事件の背景』『香椎潟』五一号、二〇〇五年二月、参照。
- (二五) 毎日新聞社調査『五月一か月間に読んだ本』(中学生・高校生)によると、六六、六七年では、六六年中一女子で一位、六六年中一男子・六七年中一男子で二位、
- (二六) 毎日新聞社調査『五月一か月間に読んだ本』(中学生・高校生)によると、六六、六七年では、六六年中一女子で一位、六六年中一男子・六七年中一男子で二位、
- (二七) 現代図書館学講座第七巻『青少年の読書と資料』(東京書籍、一九八三年九月刊)、『第三章読書指導』の付表一三、一四に、一九三三年から七九年までの高校生『洗礼本のベスト二〇人選回数』を毎日新聞社が集計したデータがある。学年別では、一、二年生では男女とも『友情』が第一位、三年生では男子が『ころ』に次いで第二位、女子では『女の一生』(モトバツサン)に次いで第三位である。全学年を集計すると、男子では『友情』が三九回で、三五回の『ころ』をpushして第一位、女子で一位、六六年中一男子・六七年中一男子・高(校生)によると、六六、六七年では、六六年中一女子で一位、六六年中一男子・六七年中一男子で二位、

- 年六七年中一中二女子で三位、六六年中一男子中三女子で四位など上位を占めるが、高校生では六六年男子八位女子一九位あたりを最後に姿を消す。『学校読書調査二五年―あすの読書教育を考へる―』（毎日新聞社、一九七〇年一月刊）の数字による。
- (二七) 田坂『教養文化と出版史の動向について―学習研究社と旺文社の現代日本文学の全集―』『近代日本の精神形成史の研究』二〇〇五年三月。
- (二八) 田坂『講談社の『日本現代文学全集』とその前後』『香椎瀧』五〇号、二〇〇四年二月。
- (二九) とともに一九九一年一月五日刊。